

過疎の村から

高橋忠夫

(1)

「ねえ、狩野先生ってまだ健在なの」

出がけに高校二年生の一人息子が靴をトントン鳴らしながら聞いた。

一瞬、里子は「健在」などという大人びた言い方をした透の成長に驚き、同時に「狩野先生」という響きが遠くから聞こえてくる救急車のサイレンの音を聞くような胸騒ぎを感じた。

「えっ、多分ね」ととつさに返事はしたものの、静かな水面に小石を投げ込んだ波紋が段々に広がっていくような心の揺れを抑えることが出来なかった。

「どうして？」と聞き返したが「別に」と言つて重そうな野球道具の入った大きなバッグと鞆を担ぐようにして出て行った。

今日から予選が始まるのだと報告してくれたが、里子は野球のことは詳しく知らない。小学生の頃に離婚をしたあとで二人だけの生活になり、テレビで野球中継や野球の漫画に夢中になっていたことから、グローブを買って時々慣れないキャッチボールの相手をしていたことがあった。そのせいか中学生になってから本格的に野球をするようになり、いつも泥だらけのユニフォームやソックスをバッグから放り投げるようにして床に出すので「まあ、まあ」というのが野球とのつながりだった。

「別に」と照れるような短い返事も気になった。

本当はもっと重要なことなのに朝の忙しさに紛れてごまかしているようにも、詳しく聞かれることを拒否しているようでも、狩野先生と言った時の言葉の響きに不自然さがあつたようにも思えて不安が拡散した。

古い記憶が一度に呼び戻され、それが次第に頭の中で勝手に増殖を繰り返して、大きくなっていく恐怖もあつた。

「まさか」里子はすぐに否定した。そんなことがあるはずがないと自分に言い聞かせて出勤の準備にかかった。頭の中は不安に占領されているというのに動作は日常の手順どおりに進行していく。これも不思議なことだった。

玄関のカギを閉めて、階段の途中から駐車場に向けて車の小さなキイを押す。「カチャ」と鈍い音がした。

二〇分も走ると勤務先の中学校に着く。特に駐車場所は指定されているわけではないが、里子はいつも一番端に停める。他の先生方に遠慮してのことだが、転勤してからの習慣だった。

車から降りて校舎まで歩く。再び今朝の出来事が頭を占領し始めた。

狩野宗吉——同僚の先生方は狩野先生とは呼ばずに「宗吉さん」と呼び、生徒も「宗吉先生」と呼んでいた。だからといって人気者というわけではなく、どちらかというと存在感のない「人畜無害の宗吉さん」といった方がピッタリする。

里子が最初に宗吉先生と会ったのは、転勤してきた歓迎会の席だった。

たまたま隣の席になって、自己紹介をしたときに「私も昨年こちらにきたばかりです」といいながら「この学校はそれほど居心地は悪くないですよ」とビールではなくウーロン茶のコップを持って軽く会釈した。その時の笑顔が印象に残ってた。

宗吉先生はよく事務室にコーヒー豆を持ち込んでコーヒーメーカーのスイッチをいれたまま職員室に戻ることが多く、忘れているのかと思ったら大抵はできあがった頃に戻ってきて、他の二人の事務員にもコーヒーを勧める。よほどコーヒーが好きらしく一日に三回は事務室に顔を出す。他の先生は職員室で緑茶を飲んでいるが、宗吉先生が緑茶を飲むのは昼食の時だけだ。里子もそんな宗吉先生につられるようにコーヒーを飲むようになった。時には町のスーパーで豆を買ってくることもあった。

「おっ、これはブラジルですね」

コーヒーカップに注ぐときに言い当てるが多かった。

勤務に慣れるにつれて、里子の耳に宗吉先生の話がかつてに飛び込んでくることが多くなった。女の先生のわざとらしい言い方で「全く！ もっとハツキリ言ってくれたらいいのに」とか、「男なんだから、シヤンとしてほしいわ」という煮え切らない態度に腹をたてている様子だ。その度に里子は下を向いてクスツと笑う。

「そんなに愚図なのかしら」と思ったりするが、あまり居丈高な態度よりは

好感が持てるときえ思っていた。

「どこの学校でも同じような先生っていらっしやるんですね」仲間の事務員と顔を見合わせたが、何かがある人だと思った。本当の自分を発見できなくて一生を終わる人も多いといわれるが、宗吉先生にはその何かを感じさせるものがあつた。

三年ほどしてから宗吉先生はコーヒーを沸かす回数が少なくなり、里子との関係も減っていった。遅くまで残ることもなくなった。原因は奥様が癌で入院したからで、いつも病院に立ち寄ってから家に帰るようになった。

病院の前からだと直通のバスがあるので便利なのだそうである。里子はそんな態度を全く見せない宗吉先生を何となく哀れに思えることがある。

バスを乗り継いで学校に来るので、直線距離にすれば里子の家とそれほど違わないのに、バスだと三角形の底辺を回るように一度町の中心部に出て路線を乗り継ぐので遠回りになる。

雨の日は学校からバス停までグラウンドに沿って植えられている桜の木の下を歩いて行くのだが、周りに何もないので風の強い日などは傘をさしていてもすぐに濡れてしまう。バス停の前で待っている宗吉先生に「どうぞ」とドアを開けて送ってやりたい気分になるが、生徒や父兄の手前が憚られるので、申し訳ない気分で通り過ぎる。通過してしまつて、これから病院に立ち寄るのかと飄々としている顔の裏側をのぞいて「ほら、こんなものが見つかったわよ」と言つてやりたい衝動に駆られることが時々あつた。

「狩野宗吉かあ」

里子は校舎に向かつて歩きながらそつと言つてみた。

二年前に定年になり、囑託で講師として残る道もあつたのにさつさと退職してしまい、その後は退職手続きに来たときに会つたきりだつた。

退職する二年前に奥様が亡くなり、里子も葬儀に参列したが、特別に憔悴している様子もなく、それが不思議だつた。何があつても飄々としている姿が学校にいるときと変わらない。

そのころには何度か宗吉先生の自宅に送つていったこともあつたが、広い家で、門を入つてからぐるつと一回りして道路に出るほどのスペースがあつ

た。

「あの広い家で一人だけで、何をしているのだろうか。それとも親戚の強引な勧めで再婚したのだろうか」里子は考えたくないことだったが、時間が経ちすぎていた。

「透とはどんなつながりがあるのだろうか」

里子は記憶を追ったが、宗吉との仕事以外の付き合いばかりが蘇ってきて透との接点にたどり着かない。「夕方にでも電話をしてみようか」頼りない独り言だった。

「松野さん、考え事ですか」

後ろから国語の先生が声をかけてきた。

普段から何かと里子の気を引くような言動が多いにやけた男だった。曖昧に笑ってごまかしたが、それでも頭から狩野宗吉のことが遠ざかつては行かなかった。頭の内側にべつとりと張り付いた執拗さがあった。

(2)

三方を山に囲まれ、その間を縫うように川が蛇行して流れている。緑の固まりとその中を見え隠れしながらキラキラ光る流れに挟まれた平坦な地に大きな家が点在していた。

対岸の木立に囲まれた小高い丘の上に古い家があった。

夕方には黄色い電灯が灯り、広い部屋でテレビでも見ているのか青白い光がひっきりなしに点滅していた。

宗吉は無精髭のままぼんやりと二階の窓から点滅する光を見ていたが、柱時計を見るともう十時を過ぎていた。

「ばあちゃん、テレビを点けっぱなしにして眠ってしまったらしい」そう言いながら今日の最後コーヒーをゆっくりと飲み始めた。

翌朝、細かい雨が降り続いている中で、静かな集落にもっとも相応しくなっていたたましいサイレンの音が響いた。

隣の住人が朝になっても起き出してこないの、不思議に思ってた家の中をのぞくと、ばあちゃんが広い茶の間で横になって眠っているようだった。声

をかけたが返事がない。不吉な予感がして駆け上がった揺り動かそうとしたが、もう冷たかったという。

警察のジープと救急車が赤色灯をつけたまま狭い道をふさいでいた。その間を傘を傾けながら近所の人たちが歩いていく。みんな無表情で簡単に両手を合わせて去っていく。

「また、空き家が増えたか」宗吉はつぶやいた。

午後には町に住んでいる息子が訪ねてくることになっていた。

息子の誠一の用件は分かっていた。

それよりも孫の亜紀が一緒に来るのかどうか気がなっていた。まだ子どもに持たせる果物には時期が早い。やつとキウリが収穫できるくらいだった。車から亜紀が駆け寄ってくるのかと思っていたが、誠一は一人だった。今日は近所の友達と約束があるからということらしい。

誠一は広い玄関にゆっくりと入ってきて「橋向ここのばあちゃんが亡くなったんだって」と神妙な声で言った。

「ああ、そうらしい」宗吉はその後の息子の言い分が分かっているので、簡単に答えた。

「年寄りが一人でいると、後の面倒が周りの人にかかってくる」

だから一緒に住もうというのだ。

「親父、やっぱり一緒に住もうよ。病院も近いし、店も多いから刺激もあるよ」

何度同じ言葉で説得しただろうか。そのたびに宗吉は首を縦に振らない。「オレのことは心配するな。オレはここで生まれ、ここで育った。この山に育てられたんだ。だからここを離れるわけにはいかないんだ」

「だったら、車で送り迎えをしてやるから、時々戻ってきたらいい」

「時々戻ってくるくらいならずっとあっちにいた方がました。見てみる、この家の黒光りしている梁や柱を」

宗吉は高い天井を見た。長年の埃がこびりついていることだろうと代々この家に住んだ人たちのことを考えていた。

雪の重みに耐えてよくも今まで持ちこたえてものだとふーっとため息が出た。七十歳で亡くなった祖父の顔が浮かんだ。よく一緒に広い家の中を走

り回ってくれた。「家というのは子どもが走り回る広さが無いといけない。天気の良い日は庭で遊ぶ。それが家というものだ」よくそう言っていた。何のことか分からなかったが、子どもの心に届いていたような気がする。

「全く、もう勝手にするか」誠一は同じように天井をみながら腹立たしげに言った。

「ああ、そうしてくれ。オレ一人ならこの山が食わせてくれる」

宗吉も負けてはいない。

「でも親父、たった一人で死んでも誰も面倒を見てくれないよ。どうする。橋向かいのばあちゃんみたいになったら悲しいだろう」

「なーに、死ぬときはみんな一人さ」

「またそんなことを……」

誠一は家をでる時、妻の言った言葉を反芻していた。「私たちの知らない秘密があるんじゃないの」

まさか、親父にそんなことがあるくらいなら、むしろ頼もしいと心底思っていた。

宗吉は普段から余計なことは話さない。返事を強要されてやっと「うん」というくらいで言葉を忘れたのかと思うくらいだ。

誠一が結婚をする事になったとき「それなら、この家を改装しないと」とめずらしく嬉しそうに言って、南側の二階に応接間付きの居室が出来あがり、簡単な流し台もついた和風旅館のような部屋で誠一も気に入っていた。最初は妻も一緒に住んで随分気に入っていた。広い家なのでそれでもまだ余裕があった。

家の前ではいつも母が小さな畑で仕事をしていた。

元は町の人で畑仕事などしたことがなかったのに、近所の人の助けで、狭い畑に茄子やキウリ、トマトが実っていた。

「こうして、新鮮なものを食べると、町の人たちが可哀想に思う」母が時々箸の先でつまんだキウリを見ては言っていた。

宗吉が無口なだけに母がよく話し、それを黙って聞いているか簡単な返事をするだけだったが、それが二人の呼吸だった。

誠一が町に新しい家を買って引越すことにしたときも、「ローンの返済は大丈夫なのか」と言ったただけだった。特に妻との間に問題があった訳でもなく、ただこの地域の人たちが動員されたように町に新しい家をたて、一家で引っ越していった。

この集落の大きな流れだった。

それまで旧市街の外側に拡がっていた田んぼや畑だった場所がにわか宅地に変更になったからで、誠一もその流れに乗った。

「親父、この村も半分減った。みんな年寄りと一緒に町に住んでいる」

「みんなはみんな、オレはおれだ」

「何か理由でもあるのか」

「ここに居たいからだ。それだけだ」

これ以上言っても無駄だとばかりに宗吉は立ち上がってコーヒーマシンの支度を始めた。

「誠一、お前、白い蛇を見たことがあるか」

突然の質問だった。

「白い蛇？話には聞いたことがあるが見たことはない」

「そうか、それならいい」

それで会話は終わってしまった。

翌日、東京の本社で新しいプラントの立ち上げについて打ち合わせがあるので朝が早い。誠一は説得出来なかった無念さと、諦めの気分で町の家に戻ることにした。車を発進させるときに宗吉は畑からキウリを五、六本、紙の袋に入れて窓から差し入れてくれた。救われたような気分になった。

本社での打ち合わせは予定より早めに終わり、そのまま東京駅から新幹線に乗ればいつもと同じ時刻には家に着くと計算したが、一瞬どうしようか考えた。

東京にいる父の弟の雅彦叔父に電話をしてみた。電話をしてしまったという方が当たっている。父よりも五歳若いが今でも現役の業界紙の記者として毎日飛び回っている。

子どもの時から大人達の評価に逆らうように、誠一はこの叔父が好きだっ

た。父親のように世間体や人の目を気にすることがなく、自由気ままに生きているように映ったからだ。大学時代には誠一は学生寮から学校に通っていたが、よく調布の叔父の家に遊びに行った。というよりは金が無くなる親には内緒で五千円を借りるためだった。どういう訳かいつも五千円で、「出世払いだぞ」といいながらズボンの後ろのポケットから財布を取り出して無造作に渡してくれた。その叔父も二人の子どもが結婚をした頃に離婚をして一人で家を出てアパート生活を始めた。

中堅企業の部長まで勤めたのに、早期退職で割り増しの退職金をもらって、それで家のローンを返済したらしい。その後、知り合いの紹介で今の業界紙の仕事をしている。「やりたかった仕事だから」と聞いたことがある。それが叔父の生き方なのだろうと自分の親と比べたりもした。

携帯電話の後ろで駅の構内らしいアナウンスが聞こえていた。

「東京駅の南口で待ってる」一方的な言い方だった。

髪が大分白くなっている以外は前と少しも変わらないので安心した。

南口から大手町方面に線路に沿って並んでいる小さな焼き鳥の店に入った。

「兄貴は元気か」カウンターに座るなり雅彦叔父は言った。面倒な久しぶりの対面の挨拶など眼中にないような言い方で安心した。

「今は元気です。でもこの先、あの広い家で一人だけというのは気になるんです」

「でも体はどこも悪くないだろう。昔、野球をやっていたから丈夫なんだな」

そう言いながら、高校生の時に肩を壊してもう投げられないというときに涙を流していたと思えば話を話した。

「兄貴が涙を流したのはあのときだけだった」雅彦叔父はそう言いながら自分の掌をじっと見てから続けた。

「今は何もしていないのか。何か仕事を持ってほしいのに」

「うちの親父は叔父さんみたいに起用じゃないから。それに田舎だから」

「男にとって仕事がないのはちよつとつらいな。何か他の人の力で否応なく

働くようなことがいいんだよ。それになるべく多くの人と接触することがいいんだ」

「そんなのですか」

「そうだ。年を取ると我が儘になるからな。兄貴もずっと教員をやっていたから、我が儘は人一倍強いだろう。それだけになるべく多くの人と接触する方がいいんだがな」

「だから我々と一緒に住むように勧めるのですが、言うことを聞かない」

「怖いのかなあ。決まった集団の中に長くいると、外の世界がみえなくなつて怖くなる。歳を取るほど不安になる。オレも最初はまるで外国にでも来たような気分だったが、やっている内に未知の世界が楽しくなる」

叔父はサラリーマンの世界は縦の関係で機能しているが、一人になると三次元の世界で生きなければなくなる。そのことに気づくのが早いか遅いかの違いだと自分の経験を話した。

誠一は白い蛇を話題にしようか迷っていた。たわいもない迷信と思っている、引っかかるものがあったからだ。

「ところで何か話でもあるのか」

相変わらず人の気持ちを察するのが早い。

「特にはないんですが、叔父さん、白い蛇の話を知っていますか」

「白い蛇、なんだ、それ。まあよく聞く話だけれどもな。白蛇伝説とか、幸運の使いだとかいろいろあるらしいが」

残っていたビールを一気に飲み込んで視線を天井に向けて考える様子だった。次に何を言い出すかを考えている時の顔だ。

「あの集落の、橋向こうに大きな家があったろう。あそこの長男と同級生なんだが、彼が中学生の頃かな、そつと教えてくれたことがあった。嘘か本当かは知らないよ」

雅彦叔父の話では、それぞれの家には必ずその家を守る蛇が住んでいるという。特に白い蛇はその家の跡継ぎになる人にしか姿を見せないといのである。だから親は自分の子どもが白い蛇を見たというと喜んだものだという。ただし、そのことを決して他言してはならないときつく言われたそうだ。親と子の秘密にしておくのが昔からの決まりだったというのである。

「それじゃ、叔父さんの同級生は白い蛇を見なかったんだね。後を取らずに、おばあさんがずっと一人で暮らしていたんだよ。先日ひっそりと亡くなったけどね」

「そうか。あの人も亡くなったか」雅彦叔父は遠くに視線をやって何かを思いう出そうとしている様子だった。

「ところで、兄貴はどうして白い蛇のことを君にきいたのかな」

「分かりません。見たことがないというのと、それで会話が終わってしまいました」

しばらく考える風だったが「兄貴は必死に両足を踏ん張って耐えているのかもしれないな」といった。

「兄貴は狩野家の五代目だから、六代目がいないことになる。お前は町に出てしまったからな」

「だけど、狩野家の血は続いているよ」

「いや、そうじゃない。家系の問題ではない。あの家に住む者がいないということだ」

そう言いながら、家の存在について話し出した。

家とは人間が単に夜帰って寝るだけではない。人間の生活とは一人一人の人間がぶつかり合い、楽しみ合い、泣き合いする親友のような空気感がある所だというのである。それを代々引き継ぐのがその家の後継者の役目だという。だから空き家では意味がないのだと話した。

「人の住まなくなった家は一月もすると朽ち果てたようになる。長年人の住んだ家ほど落差が大きい」

誠一は集落の半分ほどになった無人の大きな家を思った。確かに玄関さえもが人を拒否するように雑草でふさがれている。

「兄貴はそうしたくなかったんだろう」

「しかし・・・」誠一は現実の生活を素早く連想した。

「それに時代も変わっている。一時みんな都会に出て行った時期がある。それは工業化という時代の流れだった。時代の流れというのは誰にも停められない」

「じゃあ、親父は時代の流れに抵抗しているのだろうか」誠一の独り言に近い

言い方だったが、そのことを察したのか叔父は「兄貴の本当の気持ちは同じ兄弟でも分からない」とだけ言った。

「それとも、好きな人でもいるのかな。まだ、朽ち果てる歳でもない」と冗談めかして言った。

「それくらいなら、まだいいんですが……」誠一も笑った。

帰りの新幹線の座席にほろ酔いの体を沈めながら、誠一は考えていた。

確かに五代も続いた狩野家の家は古くて大きくて暗かったが、あの山の中ではすっかりとけ込んでいて、風景の一部になっているようにも思えた。

茶の間と座敷を囲んでいる太い柱は、狩野家の人々の汗や脂や人々の雪に閉ざされたため息を吸い込んで光沢を放っている。

家を守るということは血筋以上にその時代を生きる人々を包含する機能を維持することかもしれない。

突然、誠一は「親父は白い蛇をまだ見ていないのかもしれない」と思った。

自分が白い蛇を見ていないのに五代目を引き継いってしまった。割り切れないこだわりがあつて、あの山々に根を生やしたように風景と解け合っている狩野の家が荒廃する姿は見たくない。だから白い蛇を見るまでは今の家を離れるわけにはいかないと決めているのかもしれない。それとも雅彦叔父の言った「いい人」がいるかもしれない。今まで考えたこともない事柄が酔った頭のスクリーンに様々な映像を映し出すが、どれも焦点が合わずにぼやけているのが齒がゆかった。

(3)

宗吉は朝早くから落ち着かなかつた。

自分の腕時計と茶の間の大きな柱時計を見比べたり、玄関先の大きな鏡に自分の姿を映してみたりしていたが、やっと踏ん切りがついて、玄関のカギを閉めてからも一度姿勢を伸ばした。

誰にも会わないことを願いながら、その時のいいわけさえ考えていた。

幸い誰も停留所にはいなかったし、乗り込んでからも他の乗客はいなかつ

た。

目立たないように中間の席に座った。

たった一人の乗客のために、車内放送は次々と停留所の案内や注意事項を放送している。途中で、一人だけ老婆が腰を折るようにして乗り込んできたが、終点の駅前までは二人だけの乗客だった。

久しぶりに駅前の広場に立った。タクシーが円形になった広場の縁に沿って客待ちをしていたが、駅から出てくる客のほとんどは迎えにきた自家用車に吸い込まれていく。

宗吉は腕時計を見た。約束の時間より十分ほど早い。

「駅の前で」といった松野里子の声が遠い山の端から微かに聞こえてくるような気がした。本当に彼女が来るのかどうかも不安だった。自動車なのか徒歩なのか確認していない。

ポケットからタバコを取り出して火を点けようとしたら、目の前に「たばこ厳禁」の看板があった。一度口にくわえたタバコを箱に戻して舌打ちをした。

そのとき、小さな車がスーッと宗吉の脇で止まった。

「相変わらず時間は正確なんですね」いいながら体を伸ばして助手席の扉を開いてくれた。くるつとした目と肩のあたりで内側に緩くカールした髪型も少しも変わっていない。

「元氣そうだね」

助手席に腰を落ち着かせながら言う。「ベルトをして」と手を宗吉の前に伸ばしてきた。白い細い手だと思った。思わずその手に触れるとすべすべした里子の肌の記憶が一気に戻ってきた。

そんなことに無頓着に里子は車を発進させた。

駅前のロータリーを半周して広い通りにでて、途中を左に曲がった。すぐに踏み切りを渡り、突き当たると右に折れた。

城下町のこの都市は、城下の外側に外敵の侵入を防ぐために多くの寺社を集めた。寺町通りといわれている。その通りを直角に抜けると、以前は広い田んぼが広がっていたのだが、今は新興の住宅地として開発が進み、新しい家がぎっしりと詰まっている。その中を通り抜けると新しい広い道路に出る。

信号機があるが停車している車は二、三台で静かな交差点だ。右折をして海
の方向に走る。

「先生、お元気そうでしたわ」

ハンドルを握りながら、ちらつと宗吉の方を見てから言った。

「随分会わなかった。どのくらいだろう」

「先生が退職される一年前からです。丁度四年かしら」

「少しも変わっていないね」

「変わりようがないんです」里子は正面を見ながら抗議するような声で言っ
た。

「ご迷惑でした？」

「そんなことはないさ」宗吉は慌てて否定した。

「息子の透が先生にどうしても渡してくれというものですから」

それは事実だったが、便乗して宗吉に会う姑息さを少し恥じた。

車は市街地を抜けて海沿いの細い道に入った。

以前に時々里子と来たホテルで小さな三階建ての建物が懐かしいと思っ
た。

この地方にはめずらしい日本海が一望出来るしゃれたホテルで、泊まり客
よりも結婚式などに利用されることが多く、駐車場が広い。

一階のラウンジでよくコーヒーを飲んだ。

店内の装飾は変わっていたが、雰囲気は以前そのまま安心できた。

「実は、これなんです」と紙袋から一〇cm角ほどの包みを取り出して宗吉の
前に置いた。「へえ、透くんがね。なんだろう」

「分かりません。お袋は絶対に見てはダメだというものですから」と宗吉の
手元を見ながら言った。

手を動かしながら「透くんはいくつになたんですか」と聞いた。

「もう高校二年生です。毎日野球ばかりです」

宗吉は、彼がまだ小学校の四年生くらいの時の姿しか知らない。里子の家
の近くでキャッチボールの相手をした。まだ、ボールの握り方も分からず、
買ってもらったばかりのグローブをぎこちなくはめた危ういスタイルだっ
た。

宗吉はグローブのはめ方から、ボールの握り方、投げ方を丁寧に教えた。

包みのまま耳に近寄せて振ってみると微かにゴトゴトする感触があった。開けると新聞紙で隙間を埋めた野球のボールがビニール袋に入っていて、いかにも大事そうに輪ゴムで留めてあった。

真新しいものではない。細い傷がついている硬球で、縫い目は新しい。

「どうということなんだろう」

ボールの下に小さな紙片が二つ折りにして入っていた。

「狩野先生へ。このボールは先日初めての公式戦で勝利投手になった時のウイニングボールです。ぜひ受けとってください。先生への感謝の気持ちです」と書いてあった。

あのときの少年が高校野球で活躍して、大切なウイニングボールをプレゼントしてくれたことに驚き、それまで意識的にかき消そうとしていた自分の空白の期間が一気に再現されたような気分だった。

じっとボールと紙片を見つめていると「私もみてもいいですか」と里子が手を伸ばしてきた。

何か重大な秘密か、母親に知られるとがまずいことでも書いてあるのではないかと思っただからだ。

一瞬のためらいがあって、宗吉は紙片を差し出した。

「まあ、どういうことでしょうか。透が先生に感謝の気持ちだなんて」宗吉は手短に当時のことを話した。「それ以外思いあたらない」と言いながら大事そうに里子から紙片を受けとると丁寧に元のようになつに折って箱の奥にしまった。

「知りませんでしたわ。先生と透との間にそんなことがあったなんて」

里子は安堵して言った。

「透くんは立派に成長しているんですね」宗吉はそれしか思いつかなかった。あのときの光景が少年の胸になにがしかの影響を与えたことが嬉しかった。忘れずにいてくれたこともうれしい。

沈黙していた里子はハンカチを取り出してそっと涙を拭いていた。

ラウンジには他に二組の客がいたが、宗吉は見渡してから「出よう。続き

は車の中がいい」そう言って先に立ち上がった。

車に戻ってから、里子はハンドルに両手を組んで顎を載せたままじっとしていた。

「知らなかったわ。あの子は野球が好きでそれで部活もやっていたとばかり思っていたのに、よほど先生とキャッチボールをしたことが嬉しかったのね」

しばらく沈黙の時間があってから里子は宗吉の方に体ごと向き直ってから「先生、本当にありがとうございました」と深々と頭を下げた。

何かがあると直感したのはこのことかもしれない。そんな満足感が里子にはあった。

宗吉は両肩に手を置いて「よかった」とだけ言ったが、あのと時の目を輝かせてボールを投げている少年の姿が生き生きと浮かんだ。

手の中に以前の里子の感触が蘇って来た。そつと顔を近づけると里子の頬に涙の跡が微かにあって、唇が小刻み震えていた。

「今日はここまでにして」燃えるような大きな目からでる里子の思いが痛いほど分かった。

車が動き出してから、やっと普段の状態に戻った。

「少しも変わっていないね」

「変わりようがないんです。でも、たった今、私ではないもう一人の私が必死に駆け抜けていったような気がします」里子は首をかしげて宗吉をみた。

もっと言いたいことがあるのに言葉が出てこないもどかしさがあった。今までの息子の成長を自分一人で支えてきたと思っていたが、まるで違った要因で成長していたことも驚きだった。男の子にはやはり父親が必要なのかもしれないと思った。

「私も先生が少しもお変わりがないので、安心しました」

「それよりも、透くんの次の次の試合はいつなの。出来れば応援に行きたい」今夜のうちに確認して電話をすることになった。

「ところで、まだ同じ学校に勤務？」

「ええ、同じです。ずいぶん古株になってしまいました」里子はそう言って笑った。

里子が宗吉の家まで送ってくれることになった。大体の方角は分かっているつもりだと、広い道から狭い川に沿った道を走り、信号で左折する。

「もうすぐでしたわね」確認をしてからアクセルを踏んだ。

宗吉は透君のプレゼントを両膝に載せて黙っていた。

集落の入り口から宗吉の家までは車なら数分だ。大きな家の前で「ここだよ」というと里子は急停車した。

道路に人の気配はない。西の方角にある山の裏側から夕焼けの光雲だけがわずかに光っていた。

「コーヒーでも入れるけど、上がっていく」

「まさか。みんな家の中から息を潜めて見続けているというのに」

「じゃ、明日の試合の場所と時間を忘れずにね」とそっと額に口づけをした。「ひよっとしたら、忘れてしまうかもしれない」いたずらっぽく言ってからハンドルを大きく回して門から遠ざかっていった。

里子の車が見えなくなるまで宗吉は道路に出て見送っていた。他に車は走っていない。

宗吉は急いで家に入り、透くんからもらったボールをとりあえず茶の間のサイドボードの上に置くと、右手をぐるぐる回してピッチングのフォームを取った。透くんの現在の姿は知らないが、遅しくなったことだろうと想像ができた。明日にはその姿を是非見てやろうと気持ちが高ぶった。

夕食が終わって、いつものようにコーヒーを沸かし、ゆっくりと飲んだ。いつもよりまろやかな味だった。

いきなり茶の間の電話が鳴った。

里子かと思って電話口に出ると「雅彦だよ」という低い声が飛び込んできた。

「元気ですか」

「ああ、元気だ。なんの用だい」

つっけんどうな言い方だが、男の兄弟だからいつもこんな調子だ。それで十分真意は伝わっている。

「先日、誠一君が東京に出張で来ていて、会って少し話をした。誠一君が心配していたぞ」「オレは一人で大丈夫だ」

そうは言ったものの、誠一がなぜ雅彦にそんな話をしたのか分からなかった。

「誠一は、なんと？」

「一人で居るのが心配だと。健康だから、人知れず倒れることはないだろうが、いつ何があるか分からない。それが心配なんだろう」

「余計なお世話だ」

「誰かいい人でもいるのか」遠慮のない弟の質問に一瞬返事に窮した。

「そんなもん、いるわけがないだろう」

元氣ならいいや。そう言つて電話は終わったが、とつさに里子の姿が浮かんだ。

宗吉より一年後で同じ市立中学に赴任してきた里子は、三人しかいない事務員の中で飛び抜けて元氣だった。仕事も速く、小柄のせいか動作も無駄のないキビキビした動きだった。やや甲高い声は隣の職員室にいても聞こえるほどだった。

後で分かったことだが、里子は離婚していた。それが原因で転属になったわけではないが、離婚というマイナスを新しい職場で必死に吹き消そうとしていたのかもしれない。

前からの習慣で事務室でコーヒーを沸かし、里子も一緒に付き合うようになり、たまにコーヒー豆を買ってくることもあった。それがきっかけになり、一緒に外でコーヒーを飲むことが増え、いつの間にかホテルに行くようになった。

宗吉の妻が癌で入院したことから、次第に遠ざかってしまった。

里子からの電話は夜の九時過ぎにかかってきた。

「明日の午後一時から、市営球場だそうです。透には今日、先生にお渡ししたことを言うと、なんだか安心したようです。先生がとても喜んでいたと伝えました」

気のせいか里子の声が弾んでいるように聞こえた。

翌日、宗吉は朝のバスで市内に出かけた。午後一時にしては早すぎるが、丁度いいバスの時間がないので仕方なく早めに出て、本屋に立ち寄りたり、

コーヒーを飲んだりして時間を潰し早めの昼食をとって市営球場まで歩いた。

地区予選は三回戦に入っていた。特に強いチームがない地域で、いつも地域代表は県大会で敗退することが多い。それでも高校生は真剣だ。泥だらけになってグラウンドを駆け回り、涙する。

透くんの学校の相手は地区では毎年優勝する強豪チームだった。

お互いに決め手を欠いて得点にならない。ひよつとすると番狂わせになるかもしれないという観客の声もあった。8回の裏になって、討ち取った当たりのライトフライを目測を誤って落球し、それが元で一点が入り決勝点になって透くんのチームが負けた。ベンチの前で並んだ選手の中に背番号1を着けた長身の選手がいた。うなだれていた顔を一瞬上げた時に宗吉と目があつた。だがその老人が宗吉だとは知らない。

「随分遅しくなった」色白でボールの投げ方さえ知らなかった少年の面影はない。

帰りがけに宗吉はスーパーでめずらしく大量の買い物をして、ビニール袋が三つにもなった。両手にさげてバスに乗り満足した気分で家に戻った。

玄関前の雑草がいつの間にかツンツンと伸びている。

暗い家の中に入ると昼間の強烈な日差しに馴らされた視力が急には対応出来なくて真っ暗だ。慣れた家なので茶の間に上がる上がり框にドサツと荷物を置いてふと天井を見た。

何かがじつとこちらを見ている気がしたからだ。

「まさか。白い蛇か」視力が慣れるまで待つて、目を凝らすともうその白いものは消えていた。

「違う、白い蛇ではない。ネズミか何かの間違いだ。蛇ならもつと動きがのろい」

宗吉はぼんやりと考えていると、白いものが見えたあたりにもうつすらと人の影のようなものが見え、段々に色が抜けて透明になっていく。

「やっぱり、白い蛇か。久しぶりだな」宗吉は天井に向かってゆっくりと話しかけていた。

遠ざかっていく影が消えかかった後に、自信に満ちた里子の顔がぼんやり

と浮かんだ。

突然の画面転換に戸惑ったが、次々と昔の光景がフラッシュにおびき出されるように続いていた。

「そうか、そう言うこともありかもしれない」

宗吉は黒光りしている太い柱に背中を持たせて、後ろ向きに柱を背負うようにして手をまわして言った。

ツルツルした表面が心地よい。

「まだまだ、生きる義務がある」

突然「いい人でもいるのか」という弟の声が太い柱を伝わって耳元で聞こえた。

間をおいてから「ああ、いるとも」と柱を平手でポンと叩いていてから反動をつけて太い柱から離れ、ビニール袋持ってゆつくりと台所に向かった。

板の間がギシギシと音をたてた。

長い間、この家に住んだ人たちが、一斉に足を踏みならしているように聞こえた。

終わり